

北九州市立大学
文学部紀要

第86号

『万葉集』にみる連体形の用法と構文的役割

堀尾香代子 ……………41

北九州市立大学文学部
比較文化学科
2016

『万葉集』にみる連体形の用法と構文的役割

堀尾香代子

一 連体形の用法概観

上代における活用語の連体形は、体言や準体助詞を伴わず、それ単独で体言相当句を構成する機能をもつ。このような機能は古代語と近代語との間に認められる文法的特性の違いの一つである。同様の機能は上代の連体形にも認められ、これらは文中の様々な統語的位置に現れ種々の成分として働いている。小稿では、『万葉集』中に見える連体形の用法を統語的位置に基づいて整理し、連体形の果たす機能、及び各用法における文構成上の役割について考察する¹⁾。

『万葉集』における連体形は、これが文中で働く位置によって、次の二種六類の用法に類別することができる。

- (A) 従属句 (従属節) 内部で働く
 - a 主節と間接的な依存関係を結ぶもの
 - 一 連体修飾用法
 - 二 準体用法
- b 主節と直接的な依存関係を結ぶもの

三 接続助詞下接用法

(B) 主節の述部で働く

四 連体終止用法

五 係り結びの結びの用法

六 終助詞下接用法

(A) は連体形が従属句(従属節)内部で働くもの、(B) は主節の述部で働くものである。(A)の従属句(従属節)については、その範囲を主節と直接的な依存関係を結ぶ(A)―b―|三に限定する立場もあるが²⁾、本稿では『日本語文法事典』(日本語文法学会編、二〇一四年、大修館書店、【従属句(従属節)】の項)に従い、「主節内部の要素に依存することで間接的に主節に依存する」(A)―a―|一、及び(A)―a―|二もこれに含まれた。一方、主節の述部で働く(B)のタイプは、中古に至ると四〜六のほかにも、助動詞「なり」に接続する用法(〜|連体形+なり(断定))や、疑問語が係助詞を伴わずに文末を連体形で結ぶ疑問語疑問文(「疑問語―連体形」が現れるが、上代ではいまだ「〜連体形+なり」の確例は見られず³⁾、疑問語

疑問文も「疑問語―終止形」が一般的であるため⁴、四、六の三種の用法が観察されるにとどまる。以下、右の二種六類の用法における連体形の機能を確認しつつ、各々の用法における文構成上の役割を見ていく。

二 従属句(従属節) 内部で働く連体形の用法

連体形が従属句(従属節) 内部で働く(A)のタイプには、主節と間接的な依存関係を結ぶaと、直接的な依存関係を結ぶbの二種が見える。

(A) | a | ー | ー | の連体修飾用法は、活用語の連体形が下接の体言(乃至は体言句)にかかっていくことで、体言(句)の属性を意味的により具体的に個別化し限定する役割を果たす。このような例において修飾語となる連体形は、被修飾語となる体言(句)を介し、主節との間に間接的な依存関係を結ぶ。

- (1) 「あさりする(阿佐里須流) 漁夫の子どもと人は言へど見るに知らえぬうまひとの子と(巻五、八五三番)
- (2) 「今替はる新防人が舟出する(今替尔比佐伎母利我布奈弓須流) 海原の上に波な咲きそね(巻二十、四三三五番、大伴家持)
- (3) 「我妹子が見し(吾妹子之見師) 鞘の浦のむろの木は

- 常世にあれど見し人そなき(巻三、四四六番、大伴旅人)
- (4) 「経もなく緯も定めず娘子らが織る(経毛無緯毛不

定未通女等之織) もみち葉に霜な降りそね(巻八、一五二二番、大津皇子)

- (5) 「日並の皇子の尊の馬並めてみ狩り立たしし(日双斯皇子命乃馬副而御獮立師斯) 時は来向かふ(巻一、四九番、柿本人麻呂)

- (6) 「やすみしし我が大君の敷きませる(安見知之吾王乃敷座在) 国の中には都し思ほゆ(巻三、三二九番、大伴四綱)

- (7) 「小筑波の繁き(乎都久波乃之気吉) 木の間よ立つ鳥の目ゆか汝を見むさ寝ざらなくに(巻十四、三三九六番)

右例にみるように、連体修飾語は主語、対象語をはじめとする項や題目語など文中の様々な成分となる体言にかかり、体言の属性を意味的により具体化、個別化している。これらは(1)のように一語である場合と、(2)～(7)のように複数の語から成る場合とがある。このうち後者では、活用語の連体形は単にそれ自身が体言化するのではなく、句的内容をもつ上接文言全体を括って、ひとつのまとまりをなす体言相当句を形成している。たとえば(4)～(7)では、「織る」「繁き」が連体形であることにより、これが句的内容を表わす上接文言(4)「経もなく緯も定めず娘子らが織る」(7)「小筑波の繁き」全体をまとめあげ、ひとつのまとまりをなす統合体を形成し、それ全体が修飾句となって下接体言(4)「もみち葉」(7)「木の間」

にかかっている。

このような連体修飾句のなかには、「主語―述語」を含みもつ例も見えるが、この場合、主語的体言は(2)「今替はる新防人が舟出する」(3)「我妹子が見し」(5)「日並の皇子の尊の馬並めてみ狩り立たしし」(6)「やすみしし我が大君の敷きませる」のように、一般に助詞「の」「が」によってマークされるものが広く知られている。すでに指摘があるように、「国語構文史の中心的な展開は、主格無標示構文を核とする構文体系から主格標示構文を核とする体系への展開である」⁵⁾と考えられるが、上代では主文の終止形述語に対する主語は、一般に次例のようにいまだゼロ助詞(無標示)で表示される主格無標示構文が主流である。

(8) 「我が岡の霏に言ひて降らしめし雪の摧けし(…令落雪之摧之)」そこに散りけむ(巻二、一〇四番、藤原夫人)

(9) 風をいたみ「沖つ白波(奥津白浪)」高からし「海人の釣舟(海人釣船)」浜に帰りぬ(巻三、二九四番、角麻呂)

一方、上代にはゼロ助詞(無標示)による主語表示と並んで、助詞「の」「が」によって主語的体言をマークする例が、活用語の連体形を述語にもつ例を中心に観察される。一般に助詞「の」「が」は、大きく「体言+/の/が」が連体格に立つ用法(「我が妹」「梅の花」と、連用格(主に主格)に立つ用法(「我が鶯の来鳴く」)の二種に大別されるが、このうち用言と結び付く連用格用法の「の」「が」は、その大部分が(2)

(7) のような連体形やク語法など句的体言の形成に与る述語形式と呼応する例である。一般に助詞「の」「が」は体言と結び付く連体格用法(「体言+/の/が+体言」)を本源とすると説かれるが、一方で元来連用機能と連体機能とを未分化に備える助詞と捉える立場もある。たとえば野村(一九九三)は、「ノ」が連用・連体においても未分化」であり、「原始的に修飾語たることによって被修飾語と強く一体化する」助詞と説く。連体格用法を本源と見るかどうかは見方の分かれるところであるが、後続する語と結合する働きをする助詞であることはほぼ認められてよいであろう。このような機能をもつ助詞「の」「が」が、句的体言の形成に与る述語形式へ偏在傾向を見せる理由について、少しく考えてみたい。

たとえば(2)(7)では、ひとつのまとまりをなす体言相当句を形成する機能は、元来連体形(2)「舟出する」(7)「繁き」が担っており、その機能は「の」「が」がなくともすでに保証されている。また主格無標示構文が主流である上代にあっては、「主語―述語」の文法関係も、たとえ「の」「が」がなくとも認識可能であり、体言相当句の形成と主格表示の双方において、「の」「が」は必ずしも必須の要素とは言えない。このような例における連体形句は、体言相当句であると同時に連体修飾句でもあり、連体形は上接文言を括って体言相当句を形成する機能と、下接の体言にかかっている活用語としての機能の双方を併せもつ。その分体言相当句としての不安定性を含みもち、いわ

ば助詞「の」「が」はその不安定さを補償する役割を担って連体修飾句内に介入していると推察される。連体形句をはじめ句的体言の形成に与る述語形式への連用格助詞「の」「が」の集中傾向は、一つの統合体であることの標識と、体言相当句としての安定性への補償という二つの構文的要請が働くことによる現象と考えられる。

一方、体言相当句以外の形式に助詞「の」「が」が用いられる例はそれほど多くはないものの、集中には次のような例も観察される。

- (10) 「我が背子がかく恋ふれこそ（吾背子我如是恋礼許會）
ぬばたまの夢に見えつつ寝ねらえずけれ（巻四、六三九番、娘子）
- (11) 「秋山の黄葉をかざし我が居れば（…和我乎礼婆）浦潮満ち来いまだ飽かなくに（巻十五、三七〇七番、大伴三中）
- (12) 「めづらしき君が来まさば（米豆良之伎吉美我伎麻佐婆）鳴けと言ひし山ほととぎすなにか来鳴かぬ（巻十八、四〇五〇番、久米広繩）
- (13) 「ぬばたまの夜のふけゆけば（烏玉之夜乃深去者）久木生ふる清き川原に千鳥しば鳴く（巻六、九二五番、山部赤人）
- (14) 「人言の繁くしあらば（人言之繁思有者）君も我も絶えむと言ひて逢ひしものかも（巻十二、三二一〇番）

(15) 「宮人の安眠も寝ずて（宮人能夜須伊毛祢受旨）今日今日と待つらむものを見えぬ君かも（巻十五、三七七一番、娘子）

(10) ～ (15) は助詞「の」「が」によって示される主格が、後続文内の活用語の未然形、連用形、已然形などと結び付く例である。(10) ～ (12) は助詞「が」が主語的体言をマークする例であるが、元来(10)「我が背子」と已然形「恋ふれ」、(11)「我」と已然形「居れ」、(12)「君」と未然形「来まさ」の間の主述関係は、助詞「が」がなくとも認識は可能である。このような環境下における助詞「が」は、後続文内に存在する(10)「恋ふれ」「見え」「寝ねらえず」、(11)「居れ」「満ち来」「飽かなく」、(12)「来まさ」「鳴け」「言ひし」「来鳴かぬ」などの複数の述語(句)のなかから、直下の活用語(10)「恋ふれ」「居れ」「来まさ」との呼応関係を明確にし、(10)「我が背子がかく恋ふれ」「(11)「秋山の黄葉をかざし我が居れ」「(12)「めづらしき君が来まさ」全体をひとつのまとまりをなす統合体(条件句)として結合する役割を担う。また、「の」によってマークされる例も同様に、たとえば(13)「ぬばたまの夜」は、助詞「の」の機能により、下接の述部「ふけゆけば」との呼応関係が明確に表示され、「ぬばたまの夜のふけゆけば」全体が一体的なまとまりとしてより鮮明に認識されることになる。これは仮定条件句や連用句を形成する(14)(15)においても同様である。

上代では連用格用法の「の」「が」と呼応する述語は、連体形やク語法など体言相当句を形成する語形へ偏在傾向を示すが、これ以外の従属句内にも、連用格用法の「の」「が」が用いられる例が連用格用法全体の約19%観察される。いずれの場合も「の」「が」によって表示される主格は、原則的に従属句を飛び越えて主文の述部にまでかかっていることはなく、あくまで従属句内の「主語―述語」関係表示として機能しているという共通の構文的特徴をもつが、後者は、体言相当句としての安定性を補償する必要をもたない分、「の」「が」への構文的要請度は低くなる。

主格無標示構文が主流であった上代では、従属句内における「主語―述語」の文法関係は、「の」「が」がなくとも表出は可能であり、これらの助詞は文構成上必ずしも必須の要素ではない。そのようななかで「の」「が」は、語的連続がひとつのまとまりをなす統合体であることを標示しつつ、そのまとまりが主文の「主語―述語」関係とは次元の異なる文法的単位であることを標識する。同じ従属句でも、体言相当句を形成する述語形式に局限して現れ、これ以外の語形への介入に抑制的であるのは、前者が体言相当句としての安定性を補償する必要性の高い構文環境であるのに対し、後者がそのような安定性を補償する必要性の低い構文環境であることの反映と推察される。

(A)―a―二の「準体用法」は、活用語の連体形によって括られた連体形句が、体言句に相当する働きをし、これが文中で

主語、目的語、題目語など様々な成分となる用法である。このような句は一般に「準体句」と呼ばれる。

- (16) 「我が岡の靄に言ひて降らしめし雪の擡けし(…令落雪之擡之)」そこに散りけむ(巻二、一〇四番、藤原夫人)
- (17) 「山守のありける(山守之有家留)」知らにその山に標結ひ立てて結ひの恥しつ(巻三、四〇一番、大伴坂上郎女)
- (18) 沫雪の消ぬべきものを「今までに流らへぬる(至今尔流経)」は妹に逢はむとそ(巻八、一六六二番、大伴田村大嬢)
- (19) 「萩の花咲ける(芽子花咲有)」を見れば君に逢はずまことも久になりにけるかも(巻十、二二八〇番)
- (20) 暁の家恋しきに「浦廻より梶の音する(宇良未欲理可治乃於等須流)」は海人娘子かも(巻十五、三六四一番)
- (21) 世の中は数なきものか「春花の散りのまがひに死ぬべき(春花乃知理能麻我比尔思奴倍吉)」思へば(巻十七、三九六三番、大伴家持)
- (22) 「松の木の並みたる(麻都能氣乃奈美多流)」見れば家人の我を見送ると立たりしもころ(巻二十、四三七五番、物部真鳥)
- (23) 「廩なる繩絶つ駒の後るがへ妹が言ひし(…伊毛我伊比之)」を置きて悲しも(巻二十、四四二九番、防人)
- (16) では、「我が岡の靄に言ひて降らしめし雪の擡け」を助

動詞「き」が統括しているが、この場合、助動詞「き」が連体形であることにより、これが句的内容を表す「我が岡の雪の摧けし」全体を括って、一つのまとまりをなす体言相当句を形成する。さらにそのまとまりは主文において語相当の資格をもつ単一体として、下接文言「そこに散りけむ」に対する主語（ゼロ助詞）として機能している。(17) (23) においても同様に、助動詞「けり」「ぬ」「り」「べし」「たり」「き」、動詞「す」が連体形であることにより、上接文言全体が体言相当の資格をもつ句として括られ、(17)「山守のありける」(18)「今までに流らへぬる」(19)「萩の花咲ける」(20)「浦廻より梶の音する」(21)「春花の散りのまがひに死ぬべき」(22)「松の木の並みたる」(23)「殿なる繩絶つ駒の後るがへ妹が言ひし」がひとつのまとまりをなす単一体として表出される。そしてそのまとまりが、(19) (23) では格助詞「を」の機能により、(17) (21) (22) では意義的關係により、下接動詞(17)「知る」(21)「思ふ」(22)「見る」の対象語として機能するという重層的な構造を呈する。この他、(18) (20) も、連体形によって構成される準体句は、助詞「は」により題述文の題目語として取り立てられている。

右のような準体句内においても、主語的体言は(16)「雪の摧けし」(17)「山守のありける」(22)「松の木の並みたる」(23)「妹が言ひし」のように、助詞「の」「が」によってマークされている。金水(二〇〇一)が「主格表示に助詞が充てら

れたのは、準体句が主文でなく埋め込み文であることを認識しやすくするためという動機付けが推測できる」と指摘するようには、「の」「が」は連体形によって括られる語的連続が、「主語―述語」関係にあるひとつの統合体であることを明示するとともに、体言相当句としての性格を備えた名詞節であることを標識している。連体修飾用法と同様に、助詞「の」「が」の介入により「主語―述語」を含みこむ語的連続が、句的体言としての安定性を確保している。

(A)―b―三の接続助詞下接用法は、連体形に接続助詞「を」「に」などが下接する用法である。これは「連体形+接続助詞」が主節に対する条件句となつて、主節と直接的な依存関係を結ぶ。この用法は形の上では二の準体用法(「連体形+格助詞」と同様の形式であり、集中ではこの形式の大部分が、意味的にも「連体形+格助詞」による準体句の例と見做し得るが、その識別の不分明な次のような例も確認される。

- (24) 「君により言の繁き(君尔因言之繁)」を故郷の明日香の川にみそぎしに行く(巻四、六二六番、八代女王)
- (25) 春日山山高からし「石の上の菅の根見む(石上菅根將見)」に月待ち難し(巻七、一三七三番)
- (26) 「今夜のおほつかなき(今夜乃於保東無)」にほととぎす鳴くなる声の遥けさ(巻十、一九五二番)
- (27) 「秋風に今か今かと紐解きてうら待ち居る(宇良麻知乎流)」に月傾きぬ(巻二十、四三一一番、大伴家持)

(24) では「君により言の繁き」という現状は「みそぎしに行く」理由であり、このように前後二件の間に因果の関係を認めれば、「を」は接続助詞と見做される。一方、「君により言の繁く」を「みそぎしに行く」の対象と捉えるならば、連体形句を体言相当句と見て「を」は格助詞と見做し得る。実際諸注釈書類でも、「噂が高いので」(小学館全集)と「を」を順接を表す接続助詞として訳出するものと、「人の噂のうるさいのを」(澤瀉久孝『萬葉集注釋 卷第四』中央公論社、一九五九年)と格助詞として訳出するものに分かれる。(26) の前件「今夜のおほつかなきに」も、「心がおほつかないのに」(中西進『萬葉集全訳注原文付』一九八四年、講談社)のように「に」を逆接の関係を表わす接続助詞として訳出するものと、「おぼろな夜に」(小学館全集)のように格助詞として解釈するものがあり、「に」が接続助詞か格助詞かは必ずしも明確でない。(25)(27)も同様に、「見たいのに」「待っているのに」のように解釈すれば接続助詞であるが、「見ようと思っっているときに」「待っている時に」と解釈すれば格助詞で、いずれとも判別できない。これは、連体形接続の接続助詞が「格助詞としての用法のうち、活用語の連体形に下接する場合、特に上接する表現が文(句)であるものから、接続助詞としての機能を果たすものが成立してきた。」ことに関連し、右例の境界性の曖昧さは、そのような両助詞の連続性を示唆している。

一方、助詞「の」「が」の使用状況においては、準体句()

連体形+格助詞)と接続句()連体形+接続助詞)と目される例とが、必ずしも等しい在り方を示すわけではなく、とりわけ接続句では、前後二件の意義的な関係性によって、異なる主格表示方法が採択されている。

(28) (30) は、一般に前後二件が順接の関係にあるとされる例である。

(28) 「春雨のしくしく降る(春雨乃敷布零)」に高円(山)の桜はいかにあるらむ(卷八、一四四〇番、阿辺東人)

(29) 「奥山の真木の板戸をとどとして我が開かむ(…和我比良可武)」に入り来て寝さね(卷十四、三四六七番)

(30) …見まく欲り 思ふ間に 玉梓の 使ひの来れば「嬉しむと 我が待ち問ふ(…安我麻知刀敷)」に 逆言の 狂言とかも はしきよし 汝弟の命…あしひきの 山の木末に 白雲に 立ちたなびくと 我に告げつる(卷十七、三九五七番、大伴家持)

順接条件句内では、(28)「春雨のしくしく降る」(29)「我が開かむ」(30)「我が待ち問ふ」のように、主語的体言は助詞「の」「が」によってマークされている。一般に、順接条件構文における前件には、後件の事態の継起となる事態や、原因となる事態が述べられるが、このような構文における前件は、後件への意義的な依存度が高く、後件を導くための従属句としての性格も強い。助詞「の」「が」はそのような前件内に介入して、「主語―述語」関係にある上下接文言を強く結合し、ひとつのまと

まりをなす統合体（条件句）であることを積極的に表示する役割を果たしている。

一方、前後二件が逆接の關係にある次のような例には、前件の主格表示に助詞「は」が用いられる例が散見される。

(31) 「春の雨はいやしき降る（春之雨者弥布落）」に梅の花
 いまだ咲かなくいと若みかも（巻四、七八六番、大伴

家持）

(32) 「山のまの雪は消ざる（…雪者不消有）」をみなぎらふ
 川のそひには萌えにけるかも（巻十、一八四九番）

(33) 「都辺に君は去にし（京師辺君者去之）」を誰が解けか
 我が紐の緒の結ふ手たゆきも（巻十二、三二一八三番）

(34) 「今日か来む 明日かも来むと 家人は 待ち恋ふ
 らむ」（…伊敝妣等波 麻知故布良牟）に 遠の国
 いまだも着かず…（巻十五、三二六八八番）

(35) 「み園生の竹の林にうぐひすはしば鳴きにし（…鸛波
 之波奈吉尔之）」を雪は降りつつ（巻十九、四二八六番、

大伴家持）

右は一般に前件と後件が逆接の關係にあるとされる例であるが、このような例の前件内に主語的体言が明示される場合、

(31) 「春の雨はいやしき降る」(32) 「山のまの雪は消ざる」
 (33) 「都辺に君は去にし」(34) 「家人は 待ち恋ふらむ」(35)

「うぐひすはしば鳴きにし」のように、助詞「の」「が」が位置すべき場所に、助詞「は」が用いられている。なかでも(31)は、

前件に春雨の降る様子を、後件に植物（梅の花）の様子を詠む点で、(28)と極めて類似した発想による歌であるが、(28)の前件では「春雨のしくしく降る」と主格表示に助詞「の」が用いられるのに対し、(31)の前件では「春の雨はいやしき降る」と助詞「は」が用いられている。類似的発想による条件構文でも、順接条件句には「の」連体形が、逆接条件句には「は」連体形が用いられるという異なる文法的特点が観察される。

逆接条件構文は、元来個別に存在する二つの事象を対立する事象と捉え、その二つを接続助詞によって対立的な二項として配置する構文である。逆接条件構文における前件と後件の間には、もともと順接条件構文にみる継起性や因果性のごとき事態相互の意義的関連性が希薄で、その分前件の後件に対する意義的な依存度や従属性は低い。そのような前件は、元来後件からの意義的な独立性や遊離性が強いいため、ひとつの統合体であることを積極的に指標する助詞「の」「が」への構文的要請度は低くなる。このような構文にあつては、前件は文相当句に近い性格を備え、(31) (35) のようにむしろ前後二事態の対比性の明示に助詞「は」が有効に作用する。

(A)―b―三の用法にみる主格表示方法の差異は、連体形で括られる句の文法的単位としての差異を反映するひとつの文法的事実と見做され、両者が文構成上次元の異なる構文的単位として機能していることを徴表している。

以上、(A)のタイプに現れる連体形の機能と各用法におけ

る構文上の役割を概観した。

上代語において連体形は、句的内容をもつ上接文言全体をまとめあげ、ひとつのまとまりをなす統合体を形成するという共通の文法機能を有する。これが「主語―述語」を含みこむ場合、助詞「の」「が」が主語的体言と述部とを強く結合すること、ひとつの統合体であることが積極的に明示されるが、唯一（A）―三の接続助詞下接用法の逆接条件句には、主格表示に「の」「が」の代わりに助詞「は」が使用される例が散見される。「の」「が」の使用が、体言相当の資格を備えた統合体であることの性格の強さを反映するひとつの文法事実であるとすれば、逆接条件句における「は」の使用は、後件との対比性の表出という意義的側面からの有用性に加え、連体形句の文としての独立性の高さを反映するひとつの文法事実と捉え得る。逆接条件構文における前件は、形式上は従属句の体裁をとりながらも、実質的には後件からの遊離性が強い文相当句としての性格を備え、連体形句はいわばそのような文相当句としての性格を備性が高い文の主要部の形成に参与していると見做される。とりわけ前件が題述文「題目語＋はく連体形」の句型による例はそのことを顕著に示している。

上代において従属句（従属節）内部で働く連体形句は、体言的性格を備えた単一体となって埋め込み文の一種として働くことを基本的用法とするが、文としての自立性が高い逆接条件構文の前件では、連体形句が文相当句の述部として働いており、

他の構文とは文構成上異なる文法的レベルで機能していると言える。

以下、連体形が主節の述部で働く（B）のタイプについても同様の視点から観察を加えてみたい。

三 主節の述部で働く連体形の用法

上代では連体形が主節の述部で働く（B）のタイプには、四く六の三種の用法が見える。

（B）―四の連体終止用法は、文中に係助詞や疑問語などがなく、文末（句切れも含む）が連体形で終止する用法である。この用法は、中古にいたると広く用いられるようになるが、上代ではいまだ一般的でなく、山内（二〇〇三）によれば、係助詞を伴わない仮名書きによる連体形終止の確例は集中に二十余例を数えるにとどまるといふ¹⁰。

（36）「楽浪の志賀さざれ波しくしくに常にと君が思ほせりける（…常丹跡君之所念有計類）」（巻二、二〇六番、置始東人）

（37）間なく恋ふれにかあらむ「草枕旅なる君が夢にし見ゆる（草枕客有公之夢尔之所見）」（巻四、六二一番、佐伯東人の妻）

（38）「み空行く月の光にただ一目相見し人の夢にし見ゆる（…相三師人之夢西所見）」（巻四、七一〇番、安都扉娘

子)

(39) こもりくの泊瀬の山に照る月は満ち欠けしけり「人の

常なき(人之常無)」(巻七、一二七〇番、古歌集)

(40) 「はだすすき穂には咲き出ぬ恋を我がする(皮為酔寸

穂庭開不出恋乎吾為)」玉かざるただ一目のみ見し人

故に(巻十、二二二一番)

(41) 妹をこそ相見に來しか「眉引の横山辺ろの猪なす思へ

る(…思之奈須於母敝流)」(巻十四、三三三一番)

右の例でも、連体形(36)「ける」(37)「見ゆる」(39)「なき」

(40)「する」(41)「る」が上接文言を括り、(36)「ける」(38)では一

文全体を、(37)「く」(41)では「草枕旅なる君が夢にし見

ゆる」「人の常なき」「はだすすき穂には咲き出ぬ恋を我がする」

「眉引の横山辺ろの猪なす思へる」を体言相当の資格をもつ統

合体としてまとめあげる点で、連体形は連体修飾句や準体句の

それと同様の文法機能を果たす。このような連体終止文が「主

語―述語」を含みこむ場合は、やはり(36)「君が思ほせりける」

(37)「君が夢にし見ゆる」(38)「人の夢にし見ゆる」(39)「人

の常なき」(40)「我がする」のように、主語的体言は「の」「が」

によってマークされ、体言相当句であることが標識される。

連体形が従属句(従属節)内部で働く(A)において、主格

表示の助詞「の」「が」は、句的体言としての表出であること

のひとつの指標として働くが、その場合、連体形句は単独で自

立して働くのではなく、後続する助詞や述語との意義的關係の

なかで文の成分として機能する。一方、(B)の諸構文の連体

形句には、後続する助詞や意義的關係をもつ述語は存在せず、

文末(句切れも含む)においてそれ単体で働くという統語上の

違いがある。なかでも四の用法は上代ではいまだ用例数は少な

いが、主語的体言をマークする「の」「が」は、連体形句が文

に匹敵するほどの長大な語的連続でありながら、あくまでも大

きな句的体言としてのまとまりであることを標識する。

上代に少数ながら見られるこの用法は、文中において体言相

当句として用いられることが一般的であった連体形句が、文末

にも使用されはじめる初期段階の例と目されるが、それらはい

まだ句的体言としての性格を濃厚に保持している¹¹⁾。上代には

詠嘆を表すための語法として、体言止めが盛んに用いられるが、

連体終止用法はこのような「体言に存する喚体的表出と同質の

表現を述体に求めた¹²⁾」形式として出現し、文を活用語で結ぶ

喚体的表出として、上代語における詠嘆表現の一角を担いはじ

めたと推察される。

この用法は中古にいたると広く用いられるようになり、その

一般化に伴って句的体言としての意識が薄れ、感動・詠嘆表現

としての性格も希薄化していくようである。中古には、連体終

止用法の主語的体言を助詞「は」がマークする例が現れるよう

になるが、これも句的体言としての性格の希薄化とそれに伴う

感動・詠嘆表現としての性格の消失と無関係ではないであろう。

(B)―五の係り結び文の結びの用法にも、主格表示方法にお

いて連体終止用法と同様の文法的特性が観察されるが、これは文構成上さらに重層的な構造を呈している。

文中に係助詞「ぞ」「なむ」「や」「か」が用いられる場合、文末の活用語は普通連体形で結ぶ¹³⁾。

- (42) 玉梓の君が使ひを待ちし夜のなごりぞ(其)「今も寝ねぬ夜の多き(今毛不宿夜乃大寸)」(巻十二、二九四五番)
- (43) 多摩川にさらす手作りさらさらになにぞ(曾)「この児のここだかなしき(許能児乃己許太可奈之伎)」(巻十四、三三三三番)
- (44) 妹に逢はずあらばすべなみ岩根踏む生駒の山を越えてそ(曾)「我が来る(安我久流)」(巻十五、三五九〇番)
- (45) いかにある布勢の浦ぞも(曾毛)「ここだくに君が見せむと我を留むる(吉民我弥世武等礼乎等登牟流)」(巻十八、四〇三六番、田辺福麻呂)
- (46) ねもころに片思すれか(歟)「このころの我が心どの生けるともなき(吾情利乃生戸裳名寸)」(巻十一、二五二五番)
- (47) 現にか(香)「妹が来ませる(妹之来座有)」夢にかも我か迷へる恋の繁きに(巻十二、二九一七番)
- (48) ほととぎす声聞く小野の秋風に萩咲きぬれや(也)「声のともしき(声之乏寸)」(巻八、一四六八番、広瀬王)
- (49) 粟島の逢はじと思ふ妹にあれや(也)「安眠も寝ずて我が恋ひ渡る(安我故非和多流)」(巻十五、三六三三番)

連体形(42)「多き」(43)「かなしき」(44)「来る」(45)「留むる」(46)「なき」(47)「来ませる」(48)「ともしき」(49)「恋ひ渡る」が上接文言をまとめあげひとつの統合体を形成する点で、五の連体形は既述の用法にみるそれと等しい文法機能をもつ。すでに佐々木(一九九二)、野村(一九九三)らが指摘するように、このような連体形結びの係り結び文に「の」「が」が用いられる場合、「の」「が」は常に係助詞の下に位置し、「係助詞」の「が」連体形」の語順をとるという統語規則をもつ。先述の通り、上代では助詞「の」「が」は原則主文の述語に対する主格表示に与えることはなく、主文とは次元の異なる統合体であることを標識するが、そのような機能は係り結び文内に用いられる場合も同様で、「の」「が」は「主語―述語」関係にある上下接文言を強く結合するとともに、「の」「が」連体形」が、主文の「主語―述語」関係とは構文的次元の異なる統合体であることを積極的に表示する。すなわち、「の」「が」によって結合された「の」「が」連体形」全体(42)「今も寝ねぬ夜の多き」(43)「この児のここだかなしき」(44)「我が来る」(45)「ここだくに君が見せむと我を留むる」(46)「このころの我が心どの生けるともなき」(47)「妹が来ませる」(48)「声のともしき」(49)「安眠も寝ずて我が恋ひ渡る」が主文の述部となり、係助詞によって取り立てられた成分(「係助詞」と呼応関係を結ぶことで、さらに大きな統合体を形成すると考えられる。係り結び文において、係助詞が「の」「が」連体形」のなかに割っ

て入ることができないのは、これがひとつのまとまりをなす句の体言であるため、係り結びは体言的性格を備えた「の」が「連体形」を述部に取り込むことで、「係助詞」の「が」―連体形」のごとき長大な語の連続からなる統合体を形成するという重層的な構文構造をとるものと見做される。

連体形で結ぶ係り結び文に主格助詞「の」「が」が用いられる際のこのような統語規則は、たとえば「の」「が」を用いない次のような例においても、係り成分（「係助詞」）と「連体形」句とが呼応関係を結ぶことでさらに大きな統合体を形成していることの証左ともなる。

- (50) 夕されば君来まさむと待ちし夜のなごりぞ(衣)「今も寝ねかてにする(今宿不勝為)」(巻十一、二五八八番)
- (51) うまさけを三輪の祝が斎ふ杉手触れし罪か(歎)「君に逢ひかたき(君二遇難寸)」(巻四、七二二番、丹波大女娘子)

(52) 大君の和魂あへや(哉)「豊国の鏡の山を宮と定むる(豊国乃鏡山乎宮登定流)」(巻三、四一七番、手持女王すなわち、結び部である(50)「今も寝ねかてにする」(51)「君に逢ひかたき」(52)「豊国の鏡の山を宮と定むる」全体が、係り成分(50)「なごりぞ」(51)「罪か」(52)「あへや」と呼応することにより、「係助詞」「連体形」のごとき長大な語の連続からなる係り結び文を形成しているものと解釈される。

連体形が主節の文末に位置する係り結びは、一文全体が句の体言としての性格を備えた大きな統合体であり、このような文の結び部として働く連体形句は、体言的資格を備えた埋め込み文の一種と見做される。

一方、上代には僅少ではあるが、係助詞の結び部に体言止め句が後置する次のような句型が観察される。

- (53) 天の川瀬を速みかも(鴨)ぬばたまの夜はふけにつつ逢はぬ彦星(巻十、二〇七六番)
- (54) 深海松の 深めし我を 股海松の また行き帰り 妻と言はじとかも(可聞) 思ほせる君(巻十三、三三〇一番)
- (55) になにしかも(可母) 秋にしあらねば 言問ひの 乏しき兎ら(巻十八、四二二五番、大伴家持)
- (56) 天地に足らはし照りて我が大君敷きませばかも(可母) 樂しき小里(巻十九、四二二七二番、大伴家持)
- (57) 父母を 見れば尊し 妻子見れば めぐし愛し 世の中は かくぞ(叙)ことわり ……(巻五、八〇〇番、山上憶良)
- (58) ……そほ舟に 網取り掛け 引こづらひ ありなみすれど 言ひづらひ ありなみすれど ありなみ得ずぞ(叙) 言はれにし我が身(巻十三、三三〇〇番)
- (59) 桜花今ぞ(曾) 盛りと人は言へど我はさぶしも君とし あらねば(巻十八、四〇七四番、大伴池主)

右の諸例は、係助詞により取り立てられた係り成分が体言句と緩やかに呼応し、「〜係助詞―体言」のごとき句型を形成している。この句型は体言句が文末（結び部）に位置すること、一文全体が詠嘆や感動の氣息を帯びるが、「〜係助詞―連体形」にはこのような句型との間に構文構造上の類同性が認められる。連体形止めの語法は、全体を一つの呼格体言としてまとめあげて強い詠嘆や感動を表出する終止法（いわゆる「喚体」）であるが、連体形結びの係り結び文は、このような性質を備える統合体を結び部に取り込むことで、文末を活用語で結ぶ文を長大な句的体言（喚体）として表出することを可能にしている。しかし、上代ではこの句型はすでに一般化が進んでおり、「〜係助詞―体言」に比し感動・詠嘆の氣息やニュアンスはかなり希薄化が進んでいたと推察される。むしろ、この句型が帯びる詠嘆・感動の氣息やニュアンスも、連体形そのものの機能というよりは、連体形句が文末に位置することにより生じる自ずからの表現効果である点は、体言が文末に位置する（53）（59）の句型と同様である。

すなわち、筆者は係り結び（連体形結びに限る）という構文法の成立の動機を次のように推定する。上代における連体形は、上接する語の連続を句的体言として一体的にまとめあげる機能をもち、その統合体は文中において語的性格を備えた単一体として働くことを基本的用法とするが、次第にその使用場を文末（句切れも含む）へと広げていく。とりわけ係り結び文は、

「主語―述語」を含むような大きな語的連続を述部に取り込む場合に、これと主文の主語や項、連用修飾句などの成分とを係助詞によって結合させ、さらに大きな句的体言としての統合体を形成する。上代では歴史書や宣命などの散文に比べ、和歌や歌謡などの韻文に係り結びが多用される傾向が認められるが、それはこの構文法が、個人的な心情や情意を述べあげるに相応しい表現特性を備えた構文法であったことがその一因と推測される。既述の通り、上代には連体形句がそれ単体で自立して働く連体終止用法も見えはじめるが、連体形はまだそれ単独では文終止機能をもたない。埋め込み文として働くことが一般的であった当時にあつては、連体形句全体がそのまま一文となる連体終止文よりも、連体形句が他の成分との関係（係りとの呼応関係）において働く係り結び文の方が、従来の語法に近い使用法であったことも、この構文法が繁用されるひとつの要因となつたであろう。古代語に特有の文法現象のひとつである係り結び（連体形結び）は、広義の意味で大きな句的体言と捉えられ、文体的効果としては元來連体終止用法や体言止めなどに近い性質をもつ。喚体的性格を備えたこの構文法は、感動・詠嘆表現のバリエーションの拡大というひとつの表現上の動機をもつて創出され、体言止めやク語法などとともに、感動・詠嘆表現の一角を担う形式として上代語の文法体系に定着していったと推察される¹⁴。

一方、集中には「の」「が」との共起における語順の規則性

に反して、連体形結びの係助詞が「の」「が」の下に位置する例も少数ながら観察されるが、それらの例は大多数が助詞「や」に集中している。このような「や」は、係助詞としての使用例であるよりは、係助詞の源流と目される間投助詞としての性格が濃厚であり、「や」による係り結びの前段階の姿をとどめていると推察される。また、係り結び文であることが明確な例にも、語順の規則性に反し係助詞が「の」「が」の下に位置する例が見えるが、それらは係り結び文の定着により、係り結びとしての実質的意義の形骸化が進むに伴い出現した例と推測され、係助詞としての本来の機能は希薄化している。これらについては稿を改めて観察したい。

六の終助詞の接続用法は文末（句切れも含む）に位置する連体形が終助詞を下接する用法（「―連体形＋ぞ／か（も）」など）である。この用法における連体形も、上接文言を一体的にまとめあげる点で、他の用法の連体形と同様の文法機能を担うが、連体終止用法や係り結びの用法とは異なり、連体形句が「主語―述語」を含みこむ場合、主格表示に助詞「の」「が」はほとんど用いられず、主語的体言は無標（ゼロ助詞）もしくは助詞「は」によって表示される。

- (60) 春花のうつろふまでに相見ねば月日数みつつ妹待つらむぞ(曾)(卷十七、三九八二番、大伴家持)
- (61) 秋さらば見つつしのへと妹が植ゑしやどのなでしこ咲きにけるかも(香聞)(卷三、四六四番、大伴家持)

(62) 難波道を行きて来までと我妹子が付けし紐が緒絶えに

けるかも(可母)(卷二十、四四〇四番、上毛野牛甘)

(63) ぬばたまの夜渡る月を幾夜経と数みつつ妹は(波)我待つらむぞ(曾)(卷十八、四〇七二番)

(64) ひさかたの雨には着ぬを怪しくも我が衣手は(者)干る時なきか(香)(卷七、一三七一番)

(65) かぐはしき花橘を玉に貫き送らむ妹は(者)みつれてもあるか(香)(卷十、一九六七番)

(66) 春の野に心延べむと思ふどち来し今日の日は(者)暮れずもあらぬか(糠)(卷十、一八八二番)

(67) ひさかたの天の川津に舟浮けて君待つ夜らは(者)明けずもあらぬか(寐鹿)(卷十、二〇七〇番)

先述のように、主格無標構文が主流であった上代にあって、主格表示の助詞「の」「が」は、「主語―述語」関係にある語的連続が、主文の「主語―述語」とは次元の異なる単位であることを標識するが、六の用法の連体形句はこのマーカーを原則的に排除し、代わりに(63)～(67)のように助詞「は」を用いている。この文法的事実は、連体形句の句的体言性と埋め込み文としての性格の希薄さを示唆し、四、五と六の連体形句とが文構成上異なる役割を果たすことを徴表する。先述のように上代の連体形はそれ単体では文終止機能をもたず、文末に位置する四や五の用法においても、連体形句は句的体言性を備えた統合体、ないしは句的体言性を備えた統合体の構成素として機能

している。かりに六の用法の連体形句がこのような連体終止用法や係り結びの結び用法などと等しい文法単位であるならば、題目語（「は」）に対する解説部（「連体形」）内に助詞「の」「が」の介入する例が存在してもよいはずであるが、集中に「は」「の」が「連体形」＋ぞ／か（も）」のごとき句型による例は確認できない。すなわち、主語的体言を助詞「は」によってマークする（63）「（67）のような例は、連体形句が下接の助詞「ぞ」「か（も）」と融合し、「は」「連体形＋ぞ／か（も）」のごとき構文構造による述体（題述文）の述部（解説部）を形成していると解釈される。統語的位置を同じくする（B）のなかでも、四や五の連体形句が喚体的表出、もしくは喚体的表出の構成素として働くのに対し、六の用法の連体形句は、下接の助詞との一体化により述体の述部を構成し、疑問文（詠嘆的疑問文）や断定文などの主文の形成に直接参与していると見做される。

これを終助詞の側から見るならば、「か」「ぞ」などは、終止形に接続する終助詞「や」「終止形＋や（も）」のように、終結した文に「下接して、「終止形」全体を聞き手に持ちかける助詞ではなく、上接の連体形句と一体となって主文の主要部である述部を構成し、陳述の形成に直接関与する助詞と把握される。

以上、（B）のタイプに現れる連体形の機能と各用法における構文上の役割を概観した。主節の述部で働く活用語の連体形

は、（A）のタイプと同じく、句的内容をもつ語続を一体的にまとめあげ、ひとつのまとまりをなす統合体を形成するという文法機能を担う。このような機能をもつ連体形は上代ではいまだそれ単体では文終止機能をもたず、文末に位置する場合も、あくまでも体言的性格を備えた単一体として機能することを基本とする。四や五の用法における連体形句への主格助詞「の」「が」の介入はそのような文法事実を反映している。

一方、六の用法において助詞「の」「が」の代わりに助詞「は」が使用される事実は、連体形句の句的体言性や埋め込み文としての性格の希薄さを徴表し、この用法の連体形句が下接の助詞「ぞ」「か（も）」などと融合して主文の述部を構成することを反映している。

四 まとめ

以上、『万葉集』に見られる連体形の用法を整理し、連体形の果たす機能と文構成上の役割を概観した。上代の連体形には、句的内容をもつ上接の語続を一体的にまとめあげ、ひとつのまとまりをなす統合体を形成するという共通の文法機能が認められる。このような機能をもつ連体形句は、統語的位置から、（A）〈従属句（従属節）内部で働く〉タイプと、（B）〈主節の述部で働く〉タイプの二種に大別され、各タイプには三類ずつの用法（計六類の用法）が観察される。これら六類の用法にみ

<表1>

統語的位置	文構成上の役割	
	句的体言性を備えた埋め込み文	述部の構成素
A 従属句(従属節)内部で働く	一、二	三
B 主節の述部で働く	四*、五	六

*但し、四は連体形句単体で一文を形成する。

える連体形句の文構成上の役割は一樣ではなく、表1にみるように句的体言、ないしは句的体言としての性格を備えた単一体として働くものと、独立性の高い文相当句や主文の述部(主要部)の構成素として働くものが、(A)(B)双方のタイプに乗り入れる形で分布している。

文中に位置し埋め込み文として機能する(A)―一、二と、文末に位置して一文全体を喚体として表出する(B)―四、五の連体形句は前者の役割を担い、逆接条件句の述部として機能する(A)―三と、文末で主文の述部を形成する(B)―六は後者の役割を担う。上代では述体の述部の構成素として働くのは(A)―三と(B)―六のみであるが、これらの用法においても連体形句はそれ単体では文を結ばず、文末に位置する(B)―六でも、下接の終助詞と一体化することで文終止機能を獲得し、主文の陳述の形成に与る。

中古にいたると係助詞を伴わず連体形で文を結ぶ語法が盛んに行われるようになるが、このような使用状況の変化は、連体形の機能そのものが変質していったことを示唆する。その徴候はすでに上代にも部分的に観察されるようであるが、これにつ

いては稿を改めて考察することとしたい。

〔注〕

- 1 調査には、小学館日本古典文学全集『万葉集』、『萬葉集索引』(塙書房)を使用した。なお、引用に際しては私に表記を改めたところがある。
- 2 たとえば、南(一九九三)。
- 3 上代では、断定の形式には「く体言+なり」及び「く連体形+ぞ」が使用される。
- 4 たとえば、小田(二〇一〇)は「上代歌謡・和歌では、疑問の係助詞を伴わない疑問詞疑問文は、すべて終止形で結び、例外がない」と説く。
- 5 安達(一九九二)、一七頁。
- 6 小路(一九八八)の分類に基づき算出すると、連体形やク語法、サ語法、ミ語法など体言相当句を形成する語形と結び付く例は、主格用法の「の」全体の約79%、主格用法の「が」全体の約82%を占める。
- 7 金水・大鹿・高山他編(二〇一一)「第3章 統語論(金水敏執筆)、九八頁。
- 8 『日本語文法大辞典』山口明穂、秋本守英編、二〇〇一年、明治書院。
- 9 『を』〔接続助詞〕の項。〔集中には順接条件句内に助詞「は」が現れる次の例が見えるが、

小学館全集は「アリシカバという順接条件句の主格がハをとる」とも違例で、この読み方(原文「在之者」：堀尾注)は決定的でない(頭注)と注している。

恨めしと思ひて背なはありしかば(…狭名盤在之者 よそのみ

そ見し心は思へど(巻十一、二五二二番)

10 山内(二〇〇三)には、奈良時代の文献に見える連体終止用法は「古事記歌謡に一例、祝詞・宣命になく、『万葉集』に二十余例(一一五頁)とある。

11 たとえば、野村(二〇〇三)は「古代語の連体形終止(擬換述法)は準体句と形式的に同じであって、体言的な句がそこに置かれるだけなのである」と説く。

12 山内(二〇〇三)、一八九頁。

13 ただし、係助詞の「なむ」は集中に古形「なも」一例が見られる以外例がない。また古代歌謡にも用例を認めることはできなかった。

14 係り結び文には、現在その成立起源に関して「倒置説」「挿入説」「注釈説」の三つの説が行われている。筆者は係り結びの成立起源について独自の見解をもつにいたっていないが、この構文法の成立の背後に、文末を活用語で結ぶ新たな感動・詠嘆表現の獲得という表現上の動機が潜在していたと推定している。

〈参考文献〉

- 安達隆一(一九九二)「国語構文史の一側面―主格無標示構文から主格標示構文へ―」(井上親雄・山内洋一郎編『古代語の構造と展開』一九九二年、和泉書院)所収
- 小田勝(二〇一〇)「疑問詞の結び」『岐阜聖徳学園大学紀要(教育学部編)』第四九巻
- 金水敏・大鹿薫久・高山善行他編(二〇一一)『シリーズ日本語史3 文法史』第3章 統語論(金水敏執筆)、岩波書店
- 小路一光(一九八八)『萬葉集助詞の研究』笠間書院
- 佐々木隆(一九九二)「上代語における「―か―は―」の構文」『国語国文』第六一卷第五号(六九三号)
- 南不二男(一九九三)『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- 野村剛史(一九九三)「上代語のノとガについて(上)」『国語国文』第六十二巻第二号(七〇二号)
- 野村剛史(二〇〇三)「モタリティ形式の分類」『国語学』第五四巻一 号(通巻二二二号)、国語学会
- 山内洋一郎(二〇〇三)『活用と活用形の通時的研究』第一章 奈良時代の連体形終止 清文堂

JOURNAL
OF
THE FACULTY OF HUMANITIES
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU
No. 86 September 2016

The syntactic function and the usage of attributive form from “Manyoshu”

Kayoko HORIO41

The Department of Comparative Culture
The Faculty of Humanities
The University of Kitakyushu
2016